

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520501

研究課題名（和文） 教員養成課程における英語教師の自律と動機づけの縦断的研究

研究課題名（英文） A Longitudinal Study of Autonomy and Motivation for English Teachers in Pre-service training

研究代表者

本田 勝久 (HONDA KATSUHISA)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60362745

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、質的・縦断的な研究手法を取り入れながら、より教育的な側面を重視した理論やモデルを構築することであった。つまり、これまで学習環境と社会生活環境とに区分されてきた言語学習を、より教育環境に特化した形で統合したことを意味している。アンケート結果ならびに面談結果の時系的变化を調べることにより、調査結果からの知見を教員養成カリキュラムの開発に生かすとともに、学習者の自律を促し、学習者の動機づけを高めるための教育実践力を有する教員の資質や能力さらにはその素養を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study was an attempt to establish a model of teacher autonomy and motivation by clarifying how each element of educational environments influences the other. For this purpose, questionnaires and semi-structured interviews were conducted with English teachers and students who are prospective English teachers in pre-service training in order to explore their motivational and autonomous experiences. The data were analyzed longitudinally and qualitatively. The results suggested that English teaching, student guidance, and the relationships with colleagues and guardians of students seem to influence teacher motivation as well as teacher autonomy. In addition, it was revealed that the teachers' views of their own self-efficacy regarding those motivating and autonomous factors seem to play an important role in teacher motivation. From the results, we offered some suggestions regarding the current curriculum in pre-service training and its future development.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：動機づけ、教員養成、自律

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における教師の自律と動機づけ、またその関連について明らかにする

日本を含めた東アジアにおける学習自律

や動機づけの研究は、西洋における理論の枠組みを当てはめるだけであり、自律とストラテジー学習、自律とCALLの限定的関係でなされるものが多い。また、教師の自律の研究

は、ほとんど行われていない。本研究では、日本の文脈における教員養成の学生と現職教員の自律や動機づけの認識について明らかにし、比較するとともに、自律と動機づけの関連について調査する。

(2) 日本の教員養成における教師の自律学習を促進するためのカリキュラムを開発する

日本における動機づけや自律の研究では、質問紙調査を用いて、グループとしての学習者の認識について研究したものが多く、本研究は、長期的な研究に基づいて、個々の学生の成長や変容を捉えることで、日本の教員養成課程において、教師としての自律を促進し、動機づけを高める教員養成カリキュラムづくりや教育方法の改善の課題を明らかにする。また、実証的研究により、自律を促進するカリキュラムの開発を目指し、他の教員養成カリキュラムでも広く応用できるモデル例として提示する。

(3) 量的・質的研究を融合させる

日本人研究者による自律と動機づけの研究は、単発的に選択式質問紙などによる量的手法を用いたものが主流である。これまで、研究代表者である本田は、主として、量的手法を用いた動機づけ研究を、分担者である高木は質的手法を用いた動機づけと自律学習の研究を行ってきた。本研究では、選択式質問紙調査のみではなく、定期的な記述式質問紙調査、面談調査、ビデオ観察などを含めた、統合的な研究である。量的、質的両方の面から、長期的かつ科学的な調査・研究を行い、その結果を提示することで、量的、質的研究を融合した研究方法のあり方にも貢献できると考える。

2. 研究の目的

本研究の特徴として、教師が教育実践の中でどのように学習をとらえたか、またどのような過程をふんで自律や動機づけを変容させたか、あるいは変容させなかったかに研究の主眼を置き、教師の内面的変化により目を向けたことが挙げられる。つまり、教育実践に即した形で自律や動機づけという構成概念を理解し、新しい研究領域を発展させようとすることを意味している。学習の目的や興味・関心といった内的要因は、社会的または文化的環境の中で影響を受けるとともに、教師や生徒、学習課題や評価方法、さらにはクラスサイズといった様々な教育環境における外的要因の影響を受けながら変容していく。そこで3年間の研究期間の前半は、以下の3点を明らかにするという課題に取り組む。

- 1) 英語教師の自律と動機づけとはどのようなものかを調査し、その理論的構築と枠組みを明らかにする。
- 2) 英語教師に求められる資質や能力と、教

師の自律や動機づけとの関係を調査し、高い指導力を有する英語教師の自律と動機づけを明らかにする。

- 3) 「学習者の自律と動機づけ」「教師の自律と動機づけ」に関して、教員養成課程の学生がどのような認識を持っているかを調査し、2つの関連性について明らかにする。

本研究のもう一つの特徴は、質的・縦断的な研究手法を取り入れながら、より教育的な側面を重視した理論やモデルを構築していることが挙げられる。つまり、これまで学習環境と社会生活環境とに区分されてきた言語学習を、より教育環境に特化した形で統合したことを意味している。例えば、自律の認識が高い学生と低い学生との比較分析や、アンケート結果ならびに面談結果の時系的变化を調べることにより、調査結果からの知見を教員養成カリキュラムの開発に生かすことが可能となる。そこで研究期間の後半は、以下の3点を明らかにするという課題に取り組む。

- 4) 学習者の自律を促し、学習者の動機づけを高めるための教育実践力を有する教員の資質や能力さらにはその素養を明らかにする。
- 5) 量的および質的調査の縦断研究として、教員養成課程の学生の自律と動機づけの意識の変容を調査し、特に自律の認識が低い学生の意識がどのように変容したかを明らかにする。
- 6) 教師としての自律を促進し、動機づけを高める教員養成カリキュラムを開発し、その有効性と実現可能性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 2008年度

①文献研究

内外の専門書あるいは研究報告書、専門家による知識の提供により、英語教師の自律と動機づけの理論的構築をはかる。

情報収集と分析

全国の研究開発校や特区、さらには SELHi や教育委員会を訪問し、現職教員の自律や動機づけに対する意識の実態と、教員適性、資質能力、研修内容などについての実地調査をする。

アンケート（予備）調査

英語教師に求められる資質や授業力と、教師の自律や動機づけとの関係を探るため、高い指導力を有する英語教師（達人）へのアンケート調査を実施する。アンケート結果から得られた情報を十分に吟味し、総括的な評価・判断を行なうとともに、教師の自律と動機づけの理論的構築との接点や改良点を検

知する。

(2) 2009 年度

情報収集と分析

前年度の予備調査および本調査の結果から、高い自律や動機づけを有する英語教師を訪問し、授業参観や教員へのインタビューを実施する。授業参観へは、ビデオカメラを持参し、許可を得て授業内容をビデオ録画し、授業分析を行う。

アンケート本調査

英語教師の自律と動機づけ、さらには資質と能力に関する質問紙調査を実施する。大阪府下の中学校、高等学校の教員へ質問紙を配布し、予備調査との相違点を検証し、比較分析を行う。

量的および質的調査

「学習者の自律と動機づけ」「教師の自律と動機づけ」に関して、教員養成課程の学生がどのような認識を持っているかを明らかにするため、質問紙調査および面談調査を実施する。また、上記2つの関連性について分析し、自律の認識が高い学生と低い学生に区分する。また、前年度実施した量的および質的調査の縦断研究として、教員養成課程の学生の自律と動機づけの意識の変容を調査する。特に自律の認識が高い学生と、低い学生との比較分析、アンケート結果ならびに面談結果の時系的变化を調べる。

(3) 2010 年度

量的および質的研究

量的および質的調査の縦断研究を続けるとともに、教員養成課程の学生の自律と動機づけの調査結果をまとめる。特に自律の認識が低い学生が、各種実習（観察・参与・基本・併修）を通して、どのように意識が変容したかを調査する。また、年度ごとの調査結果を集約し、時系的变化を分析する。

教員養成カリキュラムの開発

前年度までにまとめた報告書や調査結果を学会で発表し、第三者からの評価を受けるとともに、教師の自律や動機づけを涵養する教員養成カリキュラムを開発する。

③研究会の実施

教師としての自律を促進し、動機づけを高める教員養成カリキュラムづくりや教育方法の改善についての研究会を実施する。教員養成および教員研修プログラムに期待することや、教員の資質や能力について論議する。

4. 研究成果

(1) 本研究課題における国内外の位置づけ

言語学習における動機づけの研究は、社会的および文化的要因の影響を受ける学習者の学習目標についてもものがほとんどであった (Crookes, 1997)。特に Gardner (1985) に代表される社会心理学的理論 (social-psychological theory) は、アメリカやカナダ

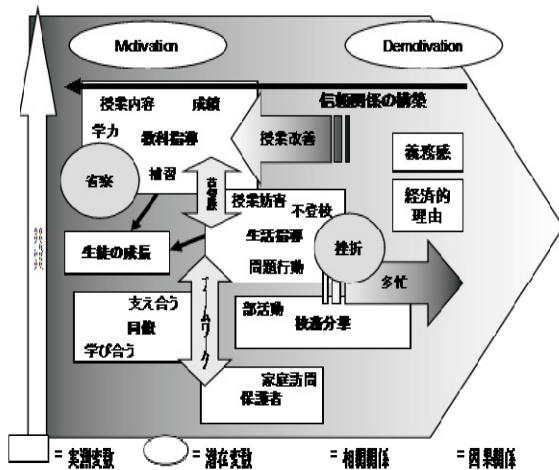
のような多民族国家で比較的多言語が使用される環境での理論であり、日本のような比較的単一民族で単一言語使用の外国語学習環境においては、その適用は疑問視されていた。さらに、日本のような EFL 環境下においては、日常の社会生活の中で英語を使用する機会は少なく、教室での活動が英語学習を規定していると考えられることができる (倉八, 1998)。このように、言語学習における動機づけをとらえるためには、学習者が属する言語環境と教室という学習環境の2つを考慮する必要がある。そのため日本の英語教師は、学習者の動機づけに重要な役割を果たしていることを自覚しなければならない。しかしながら、多くの英語教師が学習者を動機づける方略 (motivational strategies) を模索する中で、学習者を動機づける方法論に関する研究は不十分であり、そのための教員養成も確立されていないのが実情であった。さらには、教師自身がどのように動機づけられているか、日々の教育実践の中でどのように変容しているか、という教師の動機づけに関する研究は皆無であり、ヨーロッパの言語教育 (CEF) や教員養成の枠組み (ECTS) からの知見とともに、日本の英語教師の動機づけとその変容を調査し、教師自身と学習者の動機づけを高めるための教員養成システムを確立することは、本研究課題に課せられた責務であった。

また、欧米においては、言語学習者の自律性に関する研究も盛んである。言語教育では、1960年代後半に、自律学習の概念に注目が高まり、コミュニケーションアプローチの普及とともに、1980年代からは、自律学習研究が活発になってきた (Benson, 2001)。自律学習は西洋的な概念であり、文化や教育制度の異なる学習者にはなじまないとの考えから、日本を含めた東アジアでは、西洋ほど盛んに研究は行われてこなかった。しかしながら Littlewood (1999) は、東アジアの学習者にも、自律学習を促進することは有効であり、文化的・教育的背景を十分に考慮した上で、自律学習の概念を確立し、教授法の研究を行うことの重要性を主張しており、少しずつ日本でも研究が行われてきている。学習者の自律を育成する際、教師自身が自律していることが前提であるが (Little, 1995, 2001)、日本の英語教育の分野において、教師の自律に関する研究の意義について認識している研究者は少なく (中田, 2004)、あまり研究は行われていない。Benson (2001) は、自律の研究について、6つのアプローチを提示しているが、その一つが **teacher-based approach** であり、教師の役割や教師教育の観点から自律の研究を行うことの重要性を指摘している。教師の自律は、「学習者としての教師の自律」と「学習者の自律を手助けする教師」という

視点で考えられるが (Richard, 2005)、日本の教育制度や社会的な文脈を考慮したうえで、縦断的かつ実証的に、教師の自律の育成のあり方について研究することが必要であった。本研究では、教員養成課程の学生と現職教員がどのような自律についての認識を持っているか比較調査するとともに、動機づけとの関連を明らかにした上で、教員養成課程において、教師の自律を涵養するカリキュラムや教育方法を探索した。その際、教師の自律の育成に特に重要と考えられている批判的内省 (Smyth, 1989) を促す活動を取り入れ、その効果について検証した。

(2) 本研究課題における主な研究成果

下図は英語科教員が動機づけられる要因、またどの程度英語科教員がそれらの要因をコントロールできると考えているか、そしてそれぞれの要因がどのように影響しあっているかを示している。



教員として勤務し始めた時は期待も高く、動機づけられている。教育活動を行っていく中で動機づけられ、動機喪失を繰り返しながら、Motivation から Demotivation の方へ行ったり来たりするというイメージを表している。縦軸は教員がその要因の結果に影響を与える、またはそれらの要因をコントロール出来るという視点を持ちやすいかということを表している。モデル図のより上部にある要因は、教員がそれらの要因の結果にポジティブな影響を与えられることが出来るとより強く信じているものである。Motivation に近い要因は動機づけ要素だけを含んでいることを意味しているのではなく、動機づけ要因が動機喪失要因よりも教員の動機づけにより影響しているということの意味している。主に「教科指導」、「生徒指導」、「同僚や保護者との人間関係」が教員の動機づけに影響を与えていることが分かった。

「教科指導」は教員自身が授業内容を考え、教授法を学び授業に生かすなど、コントロー

ル出来る部分が多く、動機づけ要因になりやすいということが分かった。具体的には、「私たちのすることの結果ってすぐ見えないものが多いけど、工夫して教えたときに、生徒が授業分かったや授業たのしいっていう声を聞くと嬉しいね」や「留学生となんとかコミュニケーション取ろうと努力して、終わった後、達成感を感じているのを見ると嬉しい」などがあつた。このことから、授業改善や指導方法の工夫など教員の具体的な行動の結果が生徒の学習や学習態度に影響を与えていることが比較的に見えやすく、動機づけ要因になりやすいことが分かった。また、たとえ授業が1回上手くいかななくても、次どうしたら生徒に分かってもらえるかなど、前向きに次の行動を起こさせることが多い傾向にある。教科指導は努力や工夫を続けることで影響を与えられると考えている。教授方法を自ら選択し、自ら授業を行うという教科指導は教員が結果に対して好影響な行動を行いやすく、コントロールしやすいと感じていることが確認された。

一方、「生徒指導」は比較的時間がかかること、教師の思いや指導が生徒に必ずしも届くとは限らず、教科指導に比べると教師の出来ることが限られていることから、動機づけ要因にも動機喪失要因にもなりうるということが分かった。「ありがとうだったり、何気ない生徒の一言によく支えられることがある」といった動機づけ体験や「昨日と今日で全然学習態度が違って、個人によって状況も違うから怒るべきなのか違うアプローチをするべきなのか定かではないときがある。とても不安定な生徒とかを見ていると時々しんどくなる」などの動機喪失経験がある。教員の生徒指導に関する動機づけ、動機喪失経験は生徒との人間関係に関わるものが多く、教員が行ったことに対する生徒の反応は生徒がその時々感情や周りで起こっていることに影響されるため、生徒指導はコントロールしづらい要因として位置づけられている。そのため、生徒指導は教員の動機づけにも動機喪失要因にもなりうるということが明らかになった。また、教科指導と生徒指導の間では、生徒指導に時間を取られすぎて授業準備出来ないなど、葛藤を感じていることも分かった。「保護者からの電話対応や朝夜の家庭訪問などすぐにやらなければいけないことがありすぎて、その時期は正直授業のためにそこまで努力して準備したりする意味が感じられなかった」「たくさんやらなければいけない仕事があると、残念ながら授業準備が優先順位の中で最後になってしまう。英語の教師である前に教師でなければいけないから」など、教科指導と生徒指導の間で時間をやりくりしなければいけない状況のときには、教科指導の動機づけが喪失される傾向がある。

しかしながら、教科指導や生徒指導の中で特に「生徒の成長」を感じる事が動機づけ要因になりうることも明らかになった。その具体的な例としては授業中、生徒が分かった、楽しくなったと言ってくれることや生徒の態度の改善や卒業してからの活躍を聞くことなどがあげられる。「自分の中で工夫して教えた、思っていることがあればあるほど、あっ、こういう風に指導してきて良かったんやっ」など、授業や生徒と関わる時に工夫したり、苦労したりした時ほど英語科教員は生徒の喜びや成長を感じている。これは職務への要望が強ければ強いほど、達成した時の職務満足感が高いという先行研究にもあるように、工夫し、苦労した時ほど生徒の成長に動機づけられるといえる。

その他にも、同僚との支え合い、学び合いや、同僚や保護者とチームワークで生徒指導にあたるかどうかが動機づけに関わることが分かった。校務分掌や生徒指導の挫折(生徒に指導が入らないことや思いが伝わらないという繰り返し)が多忙感、挫折感となり動機喪失要因になることも分かった。

(3) 本研究課題における今後の展望

近年、自律した学習者を育成することの重要性が、日本の外国語教育の分野においても認識され、研究が増えている。しかしながら、教師の自律についての研究は、まだほとんど行われておらず、本研究課題において、学習者の自律と動機づけに関して、量的・質的研究を積み重ねてきた。学習者の自律を促進し、動機づけを高めるためには、教師の役割が重要であると考え、教師の自律に対する認識、また動機づけとの関連について明らかにすることができた。また、教員養成課程において、どのように教師の自律を育て、動機づけの向上をさせるか、個々の学生の変容に焦点を当てて、研究することは、従来の知識伝達アプローチ (transmission view of learning) を用いた教師教育ではなく、教師の発達により効果的と考えられている、社会構成主義的アプローチ (social-constructivist view of learning) を用いた新しい教師教育の方法への改善 (Williams, 2002) につながることを提案した。

また、本研究では動機づけ要因の相関関係を調べ、英語科教員の動機づけモデルの生成を試みた。その中で、教科指導、生徒指導で良好な生徒との人間関係を形成することなど、個々の動機づけ要因以外にも、教員がその要因に影響を与えられるという自己効力感を持つことが教員の動機づけには重要であるということが分かった。しかし、具体的にどのような行動を起こすことによって動機づけられるのかという「動機づけ方略」を提示することによって具体的なアクション

プランや方法を知ること、教員が影響を与えられる成功に導けるという期待を高めることによって、教員がより動機づけるための行動を起こしやすくすると考えられる。本研究課題では英語科教員の動機づけ要因の相関関係を明らかにしたが、どのような行動によって動機づけられるかという具体的な動機づけ方略を明らかに出来なかったため、今後は動機づけ方略についても研究を進める必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

①「教師を動機づけるものー英語科教員へのインタビューを通してー」戸田マリア・本田勝久、『関東甲信越英語教育学会誌』第25号、4-52 (2011) 査読有

Implementing effective professional development activities. M. Khalili Arash and TAKAGI Akiko, *Hwa-Kung English Journal*, 16, 1-29 (2010) 査読有

Promoting learner autonomy: Student perceptions of responsibilities in a language classroom in East Asia. SAKAI Shien, TAKAGI Akiko, and Chu Man-ping, *Educational Perspective*, 43, 12-27 (2010) 査読有

「小中連携を視野に入れた英語活動カリキュラムの開発に向けて」本田勝久・星加真実・小川一美、大阪教育大学教科教育学研究会『教科教育学論集』第7号、19-28 (2009) 査読無

「小学校英語活動に対する現場の意識ー必修化を目前にしてー」小川一美・本田勝久、外国語教育学会『外国語教育研究』第11号、73-89 (2009) 査読有

「外国語活動必修化への提言ー中学校英語教員への意識調査を通してー」太田洋・本田勝久、『英語授業研究会紀要』第18号、81-92 (2009) 査読有

Engaging student teachers in reflective thinking. TAKAGI Akiko, *Hwa-Kung English Journal*, 15, 217-234 (2009) 査読有

Relationship between learner autonomy and English language proficiency of Japanese learners. SAKAI Shien and TAKAGI Akiko, *Journal of ASIA TEFL*, 6(3), 297-325 (2009) 査読有

Promoting learner autonomy in a reading class. In Yoshida, T. et al. (Eds.) *Researching Language Teaching and Learning: An Integration of Practice and Theory* (pp.333-352). TAKAGI Akiko, Oxford: Peter Lang (2009) 査読有

「外国語活動必修化への提言－小学校教員の意識調査を通して－」本田勝久・小川一美・河本圭司、大阪教育大学『紀要（第部門）教科教育』第57巻 第1号、13-30 (2008) 査読有

Teachers' roles in developing learner autonomy in the east Asian region. SAKAI Shien, Man-ping Chu, and TAKAGI Akiko 他1名(3番目), *Journal of ASIA TEFL*, 5(1), 93-117 (2008) 査読有

「個人差を考慮し自律学習を促すリーディングの授業－SRA教材を用いた試み－」高木亜希子、『中部地区英語教育学会研究紀要』第37号、269-274 (2008) 査読有

〔学会発表〕(計16件)

Reflective practice in a teacher education program. TAKAGI Akiko, JALT 2010 International Conference, 2010.11.21, 愛知産業労働センター

②「教師を動機づけるもの－英語科教員へのインタビューを通して－」戸田マリア・本田勝久、関東甲信越英語教育学会第34回つくば研究大会、2010.8.21、筑波大学

③「小学校外国語（英語）活動のための教員養成」本田勝久、関東甲信越英語教育学会第34回つくば研究大会、2010.8.21、筑波大学

「動機づけ研究の現在－英語教師が知っておいた方がよいこと」本田勝久、英語授業研究学会第22回全国大会、2010.7.31、神奈川大学

How to implement professional activities. Khalili M. Arash & Akiko TAKAGI, KOREA TESOL 2009, 2009.10.24, 淑明女子大学

Improving Students' Learner Autonomy in Japanese Educational Settings. Shien SAKAI, Akiko TAKAGI, Youichi KIYOTA, & Natsue NAKAYAMA, Japan-United States Teacher Education Consortium 2009, 2009.9.19, University of Hawaii at Manoa

「学習者の自律を促す授業づくり」高木亜希子、英語授業研究学会第21回全国大会、2009.8.7、大阪成蹊大学

「大阪教育大学における小学校教員養成－学生の意識調査を通してのカリキュラム開発－」本田勝久・山本長紀、小学校英語教育学会第9回東京大会、2009.7.19、東京学芸大学

「小学校外国語活動を担う人材育成－教員養成課程における海外教育実習－」本田勝久・山本長紀、中部地区英語教育学会第39回静岡大会、2009.6.27、常葉学園大学

⑩「教員研修における小中連携－英語教員への面談調査から－」太田洋・本田勝久、中部地区英語教育学会第39回静岡大会、2009.6.27、常葉学園大学

Engaging Student Teachers in Reflective Thinking. TAKAGI Akiko, 2009 International Conference on English Teaching and Learning, 2009.5.2, Chinese Culture University

⑫「英語学習者の自律と動機づけ－新学習指導要領を踏まえて－」本田勝久・高木亜希子、関西英語教育学会第15回和歌山セミナー、2009.3.14、和歌山市民会館

⑬「英語教育における学習意欲」本田勝久、第8回英語教育総合研究会、2008.11.16、大阪大学

⑭「英語教師の動機づけ研究：Learner MotivationからTeacher Motivationへ」本田勝久、英語授業研究学会関西支部第174回例会、2008.9.20、大阪商業大学

Promoting learner autonomy: Student perceptions of responsibilities in a language classroom in East Asia. SAKAI Shien, TAKAGI Akiko, and Chu Man-ping, AILA World Congress 2008, 2008.8.28, Essen World Congress

「外国語活動必修化への提言－中学校英語教員の意識調査を通して－」太田洋・本田勝久、小学校英語教育学会第8回福島大会、2008.7.21、ビッグパレット福島

〔図書〕(計2件)

HONDA Katsuhisa (2008). Towards a New Paradigm in Language Learning Motivation: Self-Determination Theory and Japanese EFL Learners. 投野由紀夫・相澤一美・根岸昌史他(編著)『英語教育・英語学習研究 現場型リサーチと実践へのアプローチ』93-107、桐原書店

本田勝久 (2008) 「第7章 動機づけ研究」小寺茂明・吉田晴世(編著)『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』284-294、松柏社

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本田 勝久 (HONDA KATSUHISA)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：60362745

(2) 研究分担者

高木 明子 (TAKAGI AKIKO)
青山学院大学・教育人間学部・准教授
研究者番号：50343629